

## The IRON LADY

これは現在公開中の映画の題名です。「IRON LADY（鉄の女）」というのは、勿論かつて英国の首相を務めたマーガレット・サッチャー氏のことですが、女優メリル・ストリープは見事にサッチャーを演じ切っており、米アカデミー賞の最優秀主演女優賞を獲得したのも頷けます。

ところで、「The IRON LADY」の日本での題名は「鉄の女の涙」となっています。何故「涙」という言葉を付け加えたのでしょうか。映画を観る者に、何がしか予見を与えようという意図があったのかもしれませんが、私には余計なお世話という感じがしています。

さて、マーガレット・サッチャー氏は、1925年10月生まれですから86歳、現在は認知症を患い、世間からは忘れられたようにひっそりと生活しています。

貴族制度が残っている英国にあって、庶民の出であったサッチャー氏が若くして政治家を志し、一国のトップリーダーにまで上り詰め、英国病とも揶揄された経済を立て直した半生は、まさに戦いの連続であったと思います。

サッチャー氏が、英国で初めて女性として首相に就任したのは1979年、退陣したのは1990年ということですから、首相在任は11年に及びます。短命内閣が続く日本では考えられません。

サッチャー首相といえは1982年に勃発したフォークランド紛争の際、間髪入れず艦隊や爆撃機を投入し、2か月間の戦闘の後フォークランドをアルゼンチン軍から開放した強硬な対応を見て、流石「鉄の女」は凄いと感嘆したことを覚えています。たとえ血を流しても自国の領土は守る、という毅然とした姿勢は見習うべきものがあります。

サッチャー氏は、イギリス経済の建て直しを図るため、政府の市場への介入を極力抑制すべきであるとする新自由主義経済の考え方に基づき、それまでの電話、ガス、航空などの国有企業の民営化や規制緩和、更にはビックバンと呼ばれる金融システム改革を断行します。

私は、今から22年前の1990年、英国病からの立ち直りと、都市再生に向けた取組を学ぶためロンドンとリバプールを訪問していますが、その折の記

録を見ると、「サッチャー首相の肝いりでスタートしたドックランズ再開発は、10年近く経過し現在は非常に活気を呈し、着手当時不人気だった面影は全く見られない」と書いてあります。当時は私もまだ若かったですから、明るい光の部分に目が行っていたように思いますが、どのような改革にも光と影があり、実行段階では様々な混乱があり、また、新たな失業者を生むといった問題も発生しています。それでも改革の手を緩めようとしなかったのは、「それが英国のためであるという信念」ではなかったかと思っています。

サッチャー氏は、毀誉褒貶の激しい人だったといわれていますが、彼女の「鉄の意志」がなければ、英国が英国病ともいわれた経済的苦境から脱出することは難しかったでしょう。最後は、人頭税によって仲間からも裏切られ、政界を去ることになるのですが、彼女の胸中は如何なるものだったのでしょうか。

映画では、サッチャー氏が、今はなき夫に向かって「あなたは、幸せだった？」と問いかけるシーンが出てきます。私には、夫の心中は分かりませんが、ただ、彼女の問いは、英国国民に対してもなされるべきではなかったかと密かに思います。でも、そうしないのがサッチャー流とも思っています。

常に世界の中心で活躍した人が、認知症で壊れていく。その事を日々感じながら生きていく事の、恐怖や挫折感、焦燥感はいかばかりでしょう。でも、私は信じています。サッチャー氏は、そんな自分に対しても闘い続けているはずだと。(塾頭 吉田 洋一)